

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

2019年1月 第215号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 謹 賀 新 年

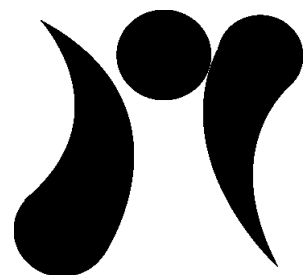
—「穏やかな終焉」が「いのち輝く未来社会」につながる創造的な年に—

新年5月より新たな元号に成ります。人生100年・長寿の時代を創り上げた『平成』の世が、『少子世代』に新しき世を引き継ぎます。

昭和の世は、戦争を経て20年代前半と40年代後半に『超多子』の世代を生み出し、団塊世代は3年間で約800万人、団塊ジュニアは3年間で約600万人が生まれました。しかしその後は40年以上、突出した多子世代は生じずに新生児は減り続け、平成30年の出生児数は約92万人です。現在の少子化を政府は『国難』と呼びます。団塊世代は今70才代に入り、ジュニア世代は40才代半ばです。この少子化が続くと、25年後・50年後には急速な人口減少社会に入ります。その頃までには社会を引継ぐ『バトンタッチ』が適度なバランスで実現していて欲しい、と願わずにはおれません。

2025年『大阪万博』の開催が決まりました。万博の大阪誘致を中心的に推し進めた松井一郎大阪府知事は「『いのち輝く未来社会のデザイン』というテーマに沿って掲げた健康・長寿というキーワードが世界中の人々の心に響いた。最後まで健康で自立した生活を送るのは全ての人に共通した願い。」と話されています。大阪の『夢洲』をメイン会場として、「万博とIR」で世界中からのお客様をおもてなしする計画が進みます。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに5年後の大阪万博と引き続く国際的な祭典で、世界中から多くの観光客が訪れる事が予測され、期待も膨らみます。超少子という国難に直面する日本社会にとっては、『新たに生まれる命が輝く』明るい未来社会をデザインする『想像力と創造力』が問われる催しです。老いて最後まで健康で自立して生きる営みと、新たに生まれる命が輝く営みとを繋ぐ道筋を、国際社会に対して『明確に示す』ことが求められます。

(次ページに続く)



(前ページの続き)

敗戦後の日本社会は、生活面でも産業・経済面でも、欧米先進諸国に追いつけ・追い越せと懸命に努力して、今やG7・G20の主要メンバーとして世界をリードします。産業・経済面では団塊の世代が高度経済成長を支えて経済大国に成りました。生活面では、団塊世代が生まれた頃の平均寿命は50才代前半でしたが、団塊ジュニア世代が生まれた頃には70才代になり、現在は男女ともに80才を優に超えて、「人生100年」を見据えて生きる時代に入っています。しかし一方でジュニア世代の誕生以降、出生児数の減少が止まらず、非常にバランスの悪い『長寿&少子』の社会に成り、現在は猛烈な労働力不足に陥っています。若い人達が、40年以上に亘って多くの長寿高齢者の暮らしを支えながら、一方で自らの結婚や出産に対しては臆病になってきた様に思えます。新たな命が誕生して成長する十数年の営みは、老いて終焉を迎える際の平均10年程の要介護期間の裏返しの様にも見え、現在同時に進行している『長寿化と少子化』には『密接な因果関係』がある様に感じます。

人は長い養育期間を要する動物です。10ヵ月程を母の胎内で育った後、全く無防備な姿で誕生して親や仲間へ身を委ねて育てられ、生産年齢に達するまでに十数年を要します。そして社会で如何様に活躍しようとも、老いて迎える最期は又、誰もが集団の中で仲間へ無防備な身を委ねます。生れた子を親が養育するのは多くの動物の本能ですが、老いて死に逝く仲間を集団の中で介護し看取るのは、人間のみが持つ『本能的習性』です。人間以外の動物は、猿も象もライオンも、死期を予感すると「群」を遠く離れます。

「猿の群」と人間が創る「社会」との違いを生み出す原点が、仲間の最期を看取る本能的習性に在る様に思えます。老いの身を委ねる仲間への『信頼感』と、無条件に受容れ支える『愛情』とが連鎖する営みの中で人は、社会を構成する一員としての『思想と人間性と社会性』を育み養い、其れがやがては無防備な身で生れる赤ちゃんと、其の存在を無条件に受容れて養育する大人達の愛情に繋がり、人間社会の歴史が連綿と続いて来たのだと思います。

人は生まれると同時に『死の宿命』を帯びています。『生と死』という『相反する価値』を背負い、社会を構成して生きる中で人は、思想を養い、人間性と社会性を育み、多様性と柔軟性を身に付けて、自然環境や社会環境の激しい変化にも柔軟に対応して生きて来ました。『生の願望』と同時に『死の宿命』を背負うからこそ人は、単一価値の生活では実現し得ない、多様で複雑な変化に対して『融通無碍に順応する力』を身に付けて来ました。人は「病気も障害も無い健康体」で100年は暮らせません。病気とも障害とも適度に付き合いながら、更には死を予期しながら、長寿の身を他者に委ねる『要介護の暮し』こそ、遺伝子では伝わらない『順応する力』を伝える『老いの本能』です。自然の摂理に添った老いの本能は、『予防の対象』ではありません。

遺伝子は『生の創造性』と同時に『死の創造性』をも伝えます。長寿であればこそ迎えられる自然の摂理に添った『穏やかな終焉』を迎えて人は、次世代に社会を引き継ぐ『創造的な使命』を果たします。穏やかな終焉の『準備』を支える介護は、豊かな『思想と人間性』が求められる『重要』な営みです。

「長寿世代」が「少子世代」に引継ぐ「新しき世」が『いのち輝く社会』であって欲しいと願い、介護が『創造性豊かな終焉』を支える『創造的な営み』でありたい、と心より願います。

## Fさんの看取りについて

ケアハウス相談員 山田 麻由美  
(介護福祉士)

Fさんは平成18年1月にケアハウスに入居されました。当時から軽度の認知症だったそうです。

平成20年12月、私はケアハウスに配属になりFさんに出会いました。その頃のFさんは毎日のように洗濯をし、1日に3回も4回も散歩に行かれていました。洗剤が無くなるとマルアイに買いに行かれるのですが、よくみかんを買って戻られます。「Fさん、何を買ってこられましたか」と尋ねると、「あ！洗剤買いに行ったのに忘れとった。もっかい行ってくるわ」と再び出かけられます。私は認知症であっても必要なことを思い出して買い物に行かれたことにすごいなと思いました。

しかし同時期に、携帯電話をテレビのリモコンと間違えて「テレビがつかない」と言いに来られたり、バスで外出して戻れなくなって警察に保護されることもありました。何年も前の請求書を持って「これはどうやって払えばいい？」「お金がないから払えない。自分でできるのに勝手に世話をして請求しないでほしい」などと言われるので説明しても、部屋に戻られると忘れ、すぐにまた同じことを尋ねに来られ、それが繰り返されます。私の対応の仕方が足りなかったのか？と思い、Fさんのお部屋で20分、30分と話をすることもありました。そうすると「こたつに入り。みかん食べるか？」と人懐っこい笑顔で返されます。

Fさんは感情の起伏が大きく、ちょっとした不安ごとに立腹されることも多かったのですが、よく笑い愛嬌のある方なので他の入居者からも愛されていたと思います。困ったことがあれば同じ階の入居者を頼り、助けてもらうことも多く、私は「認知症ではないご近所さん」との生活が認知症の進行を緩やかにしているのではないかと考えていました。

2年、3年と経ち、そういった生活にも段々と変化が現れ、「朝から何も食べてない」と怒りながら訴えることが増え、散歩に出かけて迷って保護されることも増えていきます。帰宅願望も多く、日が暮れてから「今すぐ（故郷の）丹波に帰りたい」と言われることもありました。

Fさんは不安を感じる事が多くなり、「どうしよう。私わからんようになってしまった」と話されるので「私たちがお手伝いしますよ。なんでも頼ってくださいね」と答えると「お願いします」と言い、深々と頭を下げられました。

職員は外出される際に見守り、不在時には探します。徐々に歩行は不安定になり、夜間に外出されて怪我をされることもあったため、Fさんの娘さんからは「外出させないようにしてほしい」との希望もありました。しかしやがて歩けなくなりベッド上の生活になった頃、ベッドから降りようとしたのか動かれるFさんを見て、娘さんは「母はまだ動けるのですね」と感動されていました。

Fさんは歩くことが難しくなっても、自分の目的地へ行きたいという思いがあったのかもしれません。Fさんの外出時に、家族と職員は事故を恐れて心配していましたが、本人は自分の人生を力の限り生きていただけです。その力強さは遮ることができません。それをFさんから強く感じる事ができました。

その後Fさんは食べることもわからなくなってきましたが、箸を持って器用にきざみ食を食べられる日もありました。自分では食べようとせずに私の方を見て目で訴えるとき、私はFさんに「昔、頼まれましたものね」と言いながら食事を介助しました。私にとって幸せな時間をFさんから与えられたように感じていました。

平成30年10月4日、Fさんは永眠されました。ヘルパーが訪問した際には呼吸が止まっていたそうです。最期に立ち会うことはできませんでしたが、Fさんの長い間の生活を通して看取りをさせていただいたと感じています。



## 【介護についてみんなで語ろう会（2018年10月26日）】

### 「ケアハウス、サ高住での看取り」について

ヘルパーステーション主任  
川崎 賢一（介護福祉士）

今回の介護についてみんなで語ろう会では、ケアハウス、サ高住での看取りの事例を基にお話をさせて頂きました。せいりょう園ではすべての事業所で、亡くなるまでお世話をさせて頂いています。

最初の事例では、ケアハウスに住まわれていた、Y氏の事例を取り上げました。Y氏は常に自分の明確な意思を他者に伝える芯の強い方でした。困ったことがあれば同じ階の方に、夜中に腰が痛いからシップを貼ってほしい、薬を塗ってほしいと自分で訪ねて行かれていました。トイレも自力で何とか行こうとされていた方でしたが次第にオムツを使用するようになり、他者に身を任せるようになっていきました。亡くなる前日には、御本人から「お世話になった方に挨拶がしたい」と希望があり、同じ階の方、家族、介護職員を居室に招き、一人一人の手を取り言葉にならない声で感謝の気持ちを伝えておられました。Y氏の意思を最期まで尊重した看取りを行うことが出来たように思います。事例発表後、Y氏と同じ階に住まわれていた方からコメントを頂いています。「わしらは、Yさんと同じ5階に住んどるもんやけど、同じ5階に住んどる方とは、Yさんも含めて、昔ながらの近所の付き合いをしている。最近近所付き合いも希薄になっとるみたいやけど、わしらは一つの集落が家族みたいに暮らしていた昔の人付き合いがそこに有る。困った時はみんな声掛け合って、同じ階の人間で助け合う様にしている、楽しく充実した生活をさせてもらっとる。Yさんはその中で、近所の付き合いを大切に、常に感謝の気持ちを忘れない方やった。」と話されていました。

次の事例では、リバティかこがわに住まわれていたH氏の事例を取り上げました。H氏は御家族から気丈でわがままな性格と言われており、認知症のある方でしたが「気ままに生活がしたい」と常々話されていました。元々は他のサービスを利用されていた方で、当時はリバティかこがわ1階にあるテレビ前のソファがH氏の定位置でした。それから定期巡回・随時対応型訪問介護看護のサービス利用に移られてからもソファの所に来ておられ、他に誰も来なくても毎日その場所で過ごされていました。又自分が思い立った時には、歩行器を押してせいりょう園の前の道を必ず東方面に歩いて行かれ、近所の方に何度か助けて頂いたこともありました。最期はピンピンコロリを絵に描いたような亡くなり方で穏やかな表情で亡くなりました。この事例では、亡くなる瞬間まで、自分のしたいことを一生懸命に取り組み、日々自分の力を精一杯出し尽くして生活されていたことを話しました。

最後の事例では、リバティかこがわに住まわれていたA氏の事例を取り上げました。A氏は重度の認知症で意思疎通が困難で寝たきりの方でしたが、自身のサービス担当者会議に参加されて、言葉が分からなくてもその場の雰囲気や職員の顔色等で自分が置かれている状況を感じ取られていることを、その時御本人が流された涙から自分の老いと、病状を受け入れられたと感じ取れました。

認知症の方ほど感性や感覚が研ぎ澄まされ、人間の本質を捉える力や物事を感じ取る力が強いように思います。だからこそ、全ての利用者に対し、本人の意思を尊重したケアを行わないといけないと感じました。

我々介護職員はせいりょう園の理念である、最期まで本人の意思を尊重し、自己決定して

頂き、全てを介護するのではなくその方が出来る限り自立した生活が出来る様に援助しています。

上記の看取りの事例を通し、その方の命が枯れてゆく場に立ち合わせて頂くことで、家族や友人に対し、その方の命のバトンが引き継がれる場面を目にすることがあります。そこには本人の意思や、思想、表現力、家族の葛藤や意思が入り交じり、家族や介護職員はその方の意思や思想をかみ砕くことで、人として成熟させて頂いています。しかし、介護職は家族と同じことをするではありません。そこには、医療的知識や介護技術、家族への説明やアドバイス、家族を支える相談援助等、介護職の専門性があります。我々はそれらの専門性に自信を持ち、胸を張って介護をさせて頂いています。

一昨年のJR東海の訴訟問題のように、世間ではまだまだ認知症の方は責任無能力者と思われています。認知症の方や死んでゆく方をケアすることに、価値があることを今後も地域に発信していきたいと思えます。



#### アンサンブル4【2018年12月21日】

ここしばらく生の楽器演奏など聴く機会はなかったが、久しぶりに聴くことができました。伸びのある音色のサクソフォンに、音量豊かなエレキギター。曲目は誰の耳にも馴染のあるものばかりだったこともあって、ついつい仕事を忘れて聴き入ってしまった程でした。利用者の方々も、とても穏やかな表情だったように見受けられました。このようなイベントは大事だと思います。単に気分転換という言葉では片づけられない要素があるように思えるからです。脳内に発現する $\alpha$ 波は、薬より利用者にとって有益だからです。 $\alpha$ 波の発現については、スタッフにも言えることなので、ある意味一石二鳥です。今後もこのような機会があればできるだけ耳を傾けるようにしたいと思います。



(デイサービス 前田 佳俊)



#### お餅つき大会【2018年12月26日】



年末締めくくり行事のお餅つきがありました。今回も社会福祉協議会の方をはじめ、松風会ボランティアの皆様、いつも園に来てくださっているボランティアの方々にご協力をいただき、入居されている方とご家族・職員・子供たちが代わる代わるお餅つきを楽しみました。そしてつきたてのお餅をみんなで頂きました。いつも刻んだお食事を食べている方も、つきたてのお餅は柔らかく少し歯ごたえもあって、スムーズに食べていらっしかったです。そして食べはじめると「きな粉食べたから次は大根おろしで！」とお代わりコールが飛び交うほどに盛況でした。

(ユニット型特養主任 福田 真希)



## 【介護についてみんなで語ろう会（2018年12月21日）】

### 「感染症」について

訪問看護ステーション主任  
石井 朱美（看護師）

感染症についての手洗いの実践を交えて、日頃の予防について話し合いました。

これからの季節、インフルエンザに注意しなければいけません。インフルエンザに罹ると高熱やだるさ、関節痛などの症状が多くみられ合併症を発症する傾向にあります。

インフルエンザに感染する可能性はどの年齢層の人にもありますが、特に注意が必要なのが高齢者です。高齢者は全般的に免疫機能が弱くなっているために感染しやすく、発症すると症状が長引いて重症化し、合併症を起こし死に至ることがあります。最も多い合併症は肺炎です。

インフルエンザはすでに罹っている人がくしゃみや咳をしてウィルスが空気中に浮遊して、それを吸い込んで感染します。また、罹っている人がくしゃみや咳を手で押さえて、その手が触れた場所を他の人が触ってしまうことでも感染します。電車のつり革やドアノブなど注意が必要です。

インフルエンザを予防するために予防接種を受けますが、予防接種をしていても発症することがあります。しかし予防接種をしていると、発症しても重症化を防いでくれます。予防接種以外には手洗いを正しく行うことが重要です。生活している中ではいろいろな場所でさまざまなものに触れ、知らない間に手にウィルスが付着してしまうのはやむを得ないことです。帰宅時に手洗い・うがいを徹底して行い、家事の前後・食事前などにも手洗いを行ってほしいです。喉の乾燥を防ぐ為にもうがいは有効です。人の多い場所ほど感染しやすくなるので、流行時はなるべく人ごみを避けるようにし、外出時にはマスクを着用し予防します。

感染症の一種として、食中毒についても話をしました。

食中毒の中でもカキが原因で起こるノロウィルスは毎年流行しています。ノロウィルスは他の感染症に比べて感染力がとても強く、ウィルスがごく少量でも人の身体に入ると体内で繁殖し下痢・嘔吐の症状を発症させます。またノロウィルス以外にも、家庭で身近な料理であるカレーやシチューで起きやすい食中毒についても話しました。カレーやシチューなどを温かいまま2時間以上放置しておく、菌が食べ物の中で繁殖するので注意が必要です。ルーを使った料理はトロミが強くて冷めにくいので、加熱後に早く冷ますことで菌の繁殖は抑えられます。平たい鍋に移し替えて、ルーが空気や冷たいものに触れる面積を増やして冷ますことが望ましいです。

感染症予防の基本は手洗いが重要な為、普段の手洗いが正しく行えているか参加者の皆さんに普段の手洗いを実践してもらい、洗い残しの部分を確認しました。その結果、数人の方でしわや爪のまわり、手荒れの部分や手首などに洗い残しがみられました。掌だけでなく、

指の間、手の甲、爪の周り、手首も丁寧に洗うことが大切です、石鹸で10秒手洗い・流水で15秒洗い流すことを2回行うと効果的です。

栄養と睡眠を十分にとり、日頃から体調をしっかりと整え、手洗いを正しく行い、感染症を予防することが大事であると学んでいただけたと思います。



## Sさんの看取りについて

ヘルパーステーション 窪内 誠  
(介護福祉士)

Sさん（ご主人）は、ご夫婦でリバティかこがわに入居されていました。言葉数は少なく、必要なことしかしゃべらない方でしたが、自身の意見ははっきりとっておられました。入居された当初は、ベッドのL字柵を持ち立位をとり、少しの介助でベッドと車イス間の移動も可能でした。食事も車イスに座り、自身で食されていました。そのような生活も体力の衰えとともに、全介助でなければ移乗が困難になったり、食事形態もミキサー食へ変更したりと、ケア内容も見直されていきました。手足の拘縮も目立つようになり、ポジショニング（安楽な姿勢維持）やマッサージも取り入れ対応しました。

平成30年に入ってからは、食後にゴロ音（のどの辺りでゴロゴロという音）がみられることも増えていきました。水分、食事量も徐々に減っていきましたが、それでも亡くなられる一週間前まで、食事を5割～10割食される日も少なくはなかったです。亡くなられた当日（5/22）の夕食時、夕食後薬は「いらんねん」とはっきり断られていたそうです。

Sさんが亡くなられた当日、私は夜勤でした。21時30分に訪室すると、これまでよりも強いゴロ音がみられ、顔色も白っぽく、声かけにもいつものような返事はみられませんでした。呼吸は少し苦しそうでしたが、眠っているような様子でした。口腔内には白い粘着物が確認できたので、スポンジブラシにて口腔ケアを行い、痰様のものを取り除き、口腔ケア後は、痰の排出を良くする為にも側臥位にポジショニングを行い、休んでいただきました。ご本人は延命を望まれていなかったので緊急搬送はせず、訪問看護師へ連絡の上、様子を看ました。

本来、定期巡回は決められた時間（リバティかこがわの方だと21時～22時巡回の次は3時～4時頃）での巡回なのですが（他、随時のコール対応や、必要に応じての巡回あり）、Sさんの状態が良くないこともあり、24時頃も訪室しました。ですが、その時にはすでに亡くなられていました。前後に接したその時のまま、眠っておられるようなお姿でした。

各方面へ報告、死亡の確認をされたのが24時36分でした。亡くなられているのを確認した際、同室の奥さんはよく眠っておられました。少しでも心のケアができるようにと考え、看護師が訪室し職員が複数になってから、眠っている奥さんに声をかけ、Sさんが亡くなられたことを伝えました。ご夫婦共に、その当時は91歳でした。奥さんは、「二人で100歳まで生きようね、とがんばってきたんです」と涙ぐまれましたが、「主人の分までがんばって生きていきます。」とも言うておられました。

奥さんはご主人が亡くなられてしばらくは不安定な日々を過ごされましたが、現在は隣接する自愛の家さくらに引っ越しもされ、少し落ち着かれた様子で生活されています。

私がヘルパーとして勤務している14年の間で、リバティかこがわにご夫婦で入居された方は6～7組おられました。相手のいない所でグチをこぼす方もいれば、いつでもお互いを気遣いながら過ごされている方もいましたが、どの方もパートナーとの別れの場面では、涙を流され、感謝や労いの言葉をかけていらっしゃいました。私自身も結婚をしていますが、Sさんご夫婦をはじめとした方々を手本に、お互いを支えあって生涯を終えられる関係・家族でありたいと改めて思いました。



## クリスマス会【2018年12月24日】

今まではクリスマス会は建物ごとで行っていましたが、今年は向かい合わせで建っているグループホーム同士と一緒にクリスマス会をしてみようと思い、計画を立てました。利用者の方22名とご家族、全員が集まると手狭かなと不安いっぱいのはまりでした。

最初に、職員による二人羽織を行いました。女性は化粧、男性はチョコクッキーを食べてもらいました。女性組には「そこあかんもっと上や」、男性組には「もっと大きい口あかんなん」「しっかり食べ！」等と、思った以上に好評でびっくりしました。また「それ(チョコクッキー)欲しいわおくれ」と、その方らしい言葉に笑ってしまいました。大笑いに終わった後は職員のお孫さん兄妹によるオペラ、童謡、ピアノの演奏です。こちらも好評で「また来てな」とあちらこちらから聞こえ、利用者の方から見れば孫、曾孫さんの年齢くらいで喜んでもらえたと思います。

次に、サンタさんからプレゼントがありました。ケーキを配り、ご家族ごとに写真を撮りました。プレゼントを受け取るとすぐ開けて中のお菓子を食べられる方、大事そうに机の下に隠す方、リボンをほどき結んでは又ほどき、それぞれでした。最後に利用者の方の娘さんが所属しているグループによるヘルマンハープの演奏、ハープの使い方を聞き数人の方が指導を受け弾かれていました。初めてでも弾けた事に喜ばれ、照れた顔が印象的でした。又タンバリンを持って歌う笑顔もいつもと違った笑顔です。利用者の方の息子さんがマイクを持ち、昔懐かしい演歌も唄われ本当に家族的な雰囲気で行った合同クリスマス会でした。(グループホーム 今出 さち子)



## せいりょう園空き情報【2019年1月16日】

### ●サービス付き高齢者向け住宅

- ①リバティかこがわ：6室(35㎡：2室、39㎡：3室、41㎡：1室)
- ②自愛の家さくら：10室(19.1㎡：3室、20.4㎡：1室、24.7㎡：4室、25.2㎡：1室、25.8㎡：1室)

### ●ケアハウス：空きなし(バス・トイレ・キッチン付24㎡)

### ●グループホーム：空きなし ●グループホームまどか：空きなし

[問 合 先] せいりょう園 TEL(079)421-7156/(079)424-3433



## ひょうご介護サポーター研修参加者募集中!

対 象：中・高齢者、子育てを一段落した女性、離職者等(資格は不要です)

定 員：20名 ※先着順

日 時：2019年2月27日 10:00~16:30

場 所：特別養護老人ホームせいりょう園

申込方法：別紙「参加申込書」に必要事項を記入し、FAXか郵送にてお申込み下さい

〒675-0016 加古川市野口町長砂 95-20

TEL (079) 421-7156 FAX (079) 421-6422

受講料：無料